

幼児生活団幼稚園 「あそびも生活も造形に」

藤野 和子

幼児生活団の造形のテーマは日々の生活の中にある。子ども同士が励み合う生活、動植物の世話、力いっぱい遊ぶ中で美しさや驚きを感じる心とそれらを表現する力が育くまれるようにと考えている。また、豊かな体験や素材を通して、子どもがもつ可能性に働きかけ、楽しく制作出来るようにと努めている。

幼児生活団では、美術を特別な才能教育として捉えるのではなく、毎日の子どものらしい生活の中でこそ無邪気な生き生きとした表現が出来、作品が生まれると考えている。

無心に遊ぶ、存分に身体を動かす、鳥や植物と触れ合う、音や色と出会う、そんな日々の体験の中から子ども達一人ひとりに内在された様々な可能性が引き出されていきます。生活の中で感じる感性を大切にし、その喜びや驚きを人まねでなく表現できるようにでありたいと願っています。

自分で工夫し自分らしく表現した作品、お友達と相談し協力して完成した作品、今回の美術展ではそのような子ども達の生活から生まれた数々をご覧頂いた。

I. 4才組（3歳児）

4才組は、初めての集団生活を経験する。お家の方から離れ、自分の事で精いっぱいの中で、先ず手を使って色で遊ぶこと（スタンプング）をする。絵具も紙も自分で好きな色を選び、伸び伸びと自由に遊び表現させたい。

初めて筆を使って描く絵は、62cm×46cmの大きな紙（壁紙）を使用した。

遠足で水族館に行った時に見た魚をバルサ材で作ったり、紙芝居のお話を粘土で表現したり、様々な素材に触れる体験もする。

伊藤昌子



左) 手にポスターカラーをつけてスタンプングの色あそび。

右) 初めて、筆を使って大きな紙に絵を描く。

II. 5才組（4歳児）

5才組になり、自分の世界だけでなく「友達」が生活の中での大きな存在となってくる。美術も「友達と一緒に」「協力して」楽しみながら作ることで、子ども達の関係も広がっていく。

4月の終わりには、4～5人で「こいのぼり」を制作した。自分の好きな色を選ぶのではなく、皆で相談して色組毎に色を決め、皆で選んだ台紙に、絵を描いた、描き終わると子ども達も満足気で、鯉のぼりに仕立てて頂くのが待ち遠しい様子だった。

5月に井の頭公園へ遠足に行った後、動物や風景を木で制作した。ポンドで貼ることは、5才組の子ども達には難しい所もあった。子ども達の「こうしたい」「ここに付けたい」という思いを叶えられるよう、折々に大人が手を貸した。出来上がった作品を室内に飾ると、表情豊かな動物が並んだ。

遠足へ行く前に作った「先頭の印」。5才組として組で1つだけ決定するが、子ども達は、全員が描く。子ども達の投票で、組の印が決まる。自分の組の印ができると皆喜んでいて。

4月の初めから、秋まで取り組んでいることが「ひまわり」を通しての教育だ。ひまわりの種一粒を蒔き、芽の丈を計り、大きくなってくると自分の背と比べられるように「背比べの絵」を描く。自分の等身大を描く為には二人組で協力して身体の枠を描き、そこに自分の絵を描く。今までしてきた丈計りの長さを絵の横に貼ると、ひまわりと自分が背比べすることが出来き、大きく育つことを肌で体験する。

花が咲き、「ひまわりの絵」を描くときには毎日よく見ていたひまわりを思い切り描く。毎日見ていたひまわりだからこそ、繊細に描く子ども、ダイナミックに描き、紙を付け足す子ども等様々だったが、皆よく様子を見て描いていたことが印象的だ。

10月の上野動物園への遠足では、3人毎に別れ、板に動物の絵をポスターカラーで描き、木の破片を動物の体や背景の模様にした。板にどの動物を描くかを相談したり、大きさを相談したりと皆が思いを出し合っていた。本物の動物を見た後だけ

らこそ、細部までこだわった絵が完成した。育てているひまわりや遠足の前後の製作など、美術は生活や自然と大きく繋がっている。この経験が今後、想像力や興味感心、発見する力となることを願う。

松崎彩



動物の絵を板に描く

Ⅲ. 6才組 (5歳児)

6才組は、世話をしている鳩が生活の中心であり、様々な体験から感じたことが、子ども達を成長させている。

4月から育てている鳩が、どの様にして生活団まで戻って来るのかの疑問から始まり、先ずは子ども達の自宅からの鳩飛ばしが始まる。このことから、自宅から生活団までの地図を描くこと、自分の家だけでなく次に生活団を中心に東京の立体地図を作る。東京の地図を作るに当たり、皆で東京見学に出かけ、東京タワーや皇居、新宿のビル群などを実際に見てきて、それぞれが担当を決めて制作した。

美術展では、例年絵本のお話をテーマに合作粘土を制作していたが、今年は「子ども達の生活の中にあるもの、日々身近にあるものをテーマにつくってみましょう」と古川武彦先生からご提案いただいた。先ずは、鳩をよく見ることから始めた。いつも世話をしている鳩ではあるが、羽を伸ばした時や、飛び立とうとする時に羽はどういうふうになるのか、それぞれがじっくりと鳩を観察し墨で鳩のデッサンをした。そのデッサンを基に、大小5羽の鳩と、鳩飛ばしをする子どもと空に浮かぶ雲を粘土で作ることにした。

合作粘土の制作の折にも、籠に入れた鳩を連れて来て前や後ろ、横からもよく見ながら作った。鳩の放鳩訓練を続けてきた子ども達は、鳩が飛び出す時の

感動や、空を飛ぶ姿をのびのびと表現した。羽や爪、くちばしまで丁寧に作られた鳩は、日頃、卵から孵る雛を育て訓練をしつつ世話をしてきたからこそ表わせたものだと思う。

6才組は、新たに土鈴や粘土の中にバルサ材を入れて立体感を出したテラコッタの動物も作成した。

植木鉢は、筑波大学の齋藤敏寿先生の指導で『たたら作り』の製法で作った。植木鉢の土台の上には、白や青の色付けした粘土に穴をあけたり傷をつけたりしたテクスチャーを貼りつけ、その人独特な表現が施された作品になった。釉薬をかけて焼きあがった植木鉢にオキザリスの球根を植えると、丁度美術展の開催日に可憐な花を咲かせ、大芝生に彩りを添えた。

夏には、酒井恒太先生の提案で木くずを使って材質感を表す紐絵にも取り組んだ。鉛筆で描いた動物の絵の線に接着剤を塗り、そこに麻ひもを貼りつけて輪郭を表し、模様は接着剤の上にはいろいろな種類の鉋屑を振りかける。

絵を描いた後に、何工程もあり子ども達には手のかかる手法であったが、最後に余分な粉を振り落として絵が表れた時には「わあー！」と歓声があがった。

秋の遠足では「顔振峠」に鳩を連れて出掛け頂上から飛ばした。この遠足の様子は、一人ひとりが和紙に墨で描き、裏から彩色するという手法で表した。6才組は、今年は殊に沢山の作品、いろいろな手法を教えて頂き制作する機会を多くもった。どの時間も子ども達には新鮮で、皆真剣に集中して取り組む姿が見られた。出来上がった作品も、それぞれがその人らしい工夫が表れ、子ども達の感性が日々の生活の中で育まれていることが感じられた。

村上ゆう子



スカイツリーを作る



テラコッタの制作



植木鉢の作陶

IV. 保護者の制作

こどもが描いた絵を基に、お母様が制作されたものを、パーティーで仕切った空間に展示した。どの作品も細かいパーツに工夫が施されていたり、筆のタッチを忠実に表現しようと配慮がみられたりした。描いた子ども達の気持ちやその子ども自身を思いながらひと針ひと針丁寧に作られたことが感じられ、ご覧になった方々から「これは記念になっていいですね」と感想を頂くことが多くあった。



4才組は、こどもが描いた絵をギニョールに、
5才組は、ぬいぐるみに保護者の方々が制作された。

V. 美術展を終えて

今回の美術展は、生活団の展示会場が24年ぶりに女子部体操館となった。これは、来場くださるお客様のことを考え会場を正門内で治めるという美術部会の意向でもあった。生活団としては、このことで、生活団を会場とした過去の6回とは異なる試みや新しい作品が出来ればと準備段階から計画してきた。

また、これまでと同様の作品であっても展示方法を変えることで、毎回いらして下さるお客様にも新鮮に感じて頂けるようにと会場の設営にも心を配った。

しかし、先回の美術展の翌年(2013年)、長年美術指導をして下さった三坂制先生が逝去され、それ以後美術指導者不在の状態が続いていたことが今回の開催を前になにより不安なことであった。このため、新しい作品の取り組み、特に木を使ったものの指導を男子部の酒井恒太先生に、合作粘土や立体の作品や展示に関することを女子部の古川武彦先生に指導をお願いした。お二人の先生には、制作前の相談から準備、最後の展示まで大変お世話になり、それぞれの部のことでご多用の中、快く相談にのってくださったことに感謝はつきない。

生活団の教育改革のさ中、今は美術に於いても良いものは大切に残り、刷新すべきこと、進化すべきことのみ分けの時期であると考え。このような時期に、お二人の先生方から新しいアイデアやご提案を頂きお話を伺えたことは、今後を考える上で参

考になることが多くあった。これからも折に触れ美術部会の先生方と自由学園の一貫教育として生活団の美術を考える機会を頂ければと思う。同時に、今回の美術展までの時間を通して、子ども達の感性は、日々の豊かな体験と伸びやかな生活の中で育まれることを再確認することが出来た。

今年度、5才、6才組は殊に美術制作に当てる時間が多くあった。それらの折々で、作り方の説明を聞いた後、目を輝かせて意欲的に制作に取り組む子ども達の姿が印象的であった。一見、描くこと、造ることの苦手な子どもや、取り掛かりの遅い子どもなど、一人ひとり美術に向かう思いや姿勢は異なるが、どの子どもも制作していく内に個性とその人らしさが作品に表れ、どれ一つとして同じものはない独創的な楽しい作品が生まれることが印象的であった。今後も、この時間は生活団の特色として大切にしていきたいと痛感した。

生活団では、常々、ご家庭と協力して教育を進めているが、今回の美術展でも合作粘土の為の大量の粘土こねは、大勢の保護者の皆さまの協力をいただいた。生活団から会場までの作品運びやお客様の通り道となる生活団周辺の掃除も保護者委員の方々を中心に進めてくださった。

この様に、それぞれの持ち場で、良き心配りと協力に支えられて美術展が開催できたことは感謝である。

藤野和子

4才組の作品



左) 和紙で作った鯉のぼり



右) 音が鳴るボール、オルゴールが入っている



初めて筆を使って絵を描く



初めて筆を使って描いた絵



筆で描いた十姉妹の絵と、手のスタンプングで作った箱



手のスタンプング

5才組の作品



育てたひまわりの成長と自分の背を比べる。
4月の種まきの後、発芽から7月の開花、種の収穫
までを子ども達が世話をし、観察した。



ひまわりの花が開花



花と自分の絵を描く



遠足で見た動物



遠足で使う組の印・集合の目印として使用



背負い鞆 こどもが模様を付け母が制作



鯉のぼりの合作

4才組（年少）の時とは異なり、色組毎に合作でひとつの鯉のぼりを仕上げる。色や形を自分達で相談して決め、ポスターカラーで模様を描く。



6才組の作品

陶器の植木鉢を作る。



植木鉢の制作



成型後の乾燥



素焼きの後、釉薬をかける



本焼き後・焼きあがった植木鉢



植木鉢にオキザリスの球根を植える



オキザリスの花が咲いた植木鉢



遠足で上った山の絵を墨で描く



6歳組は、秋の遠足で埼玉県吾野市の顔振峠（574m）に遠足に行き、頂上から鳩を飛ばす。訓練した鳩は、生活団の鳩小屋まで帰る。

彩色した山の絵



木屑で表現した動物



動物園でみた動物の絵とテラコッタの作品



子ども達が住んでいる東京の地図



鳩のデザイン



鳩飛ばしの様子を粘土で作る



6才組で育てた茄子の成長日記

6才組の子ども達が、雛から世話をして育てている伝書鳩。訓練の為に、少しずつ距離を遠くして「鳩飛ばし」を重ねる。その時の鳩の様子や、自分達の姿を粘土で表現した。



6歳組の子供が考えた体操会の中心の印



実際に体操会の時に中心に置いて体操する